
土産土

カツオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土産土

【Nコード】

N1104A

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

2005年の高校野球準優勝校の名川高校は、優勝校の佐々側高校にザコと言われてた。プライドだけは強い瞬太の兄、守は12時間以上の特訓をしてた。だが、ある日。いきなり午前3時から出ていった守が帰って来ない事に心配した瞬太は探しに行つてついに見つけたが…。目標に向かって歩いてく野球小説。

準優勝校名川高校（前書き）

長いけど読んでください。お願いします。

準優勝校名川高校

緊迫した野球場、チアリーダーがぼんぼんを振って、エールを送ってる。

ベンチでは監督が手を組んで何かを祈ってる。

ピッチャーがボールをぎゅっと握りしめながら見つめている。

キャッチャーがストレーターのサインをとっている。

ピッチャーがうなずく。

「さあ、ピッチャーが投げる準備をしています」

ピッチャーが滑り止めを手にまぶす。

バッターが唾を飲みながら、バットを強く握る。

監督が手を組んでいる。

ラジオのアナウンサーも緊張の一瞬を見ている。

客席が応援する。

ピッチャーが客席を見渡す。

「バッターも緊張の一瞬を見えています」

応援の声が聞こえる。

バッターも今までを振り返っている。

バッターは前を向き、ホームラン宣言のジェスチャーをする。

ホームラン宣言の直後、観客がワーワー言っている。

「ホームラン宣言をしたあー!!」

ラジオの人も手に汗が出ていく。

観客がしずまる。

ピッチャーが振りかぶって投げた。

「振りかぶって投げたあー!!」

とおなじみの言葉をラジオのマイクに吹き込む。

バッターにどんどんボールに近づいてく。

バッターが大きく振り、芯におもいきり当てて、遠くに飛んだ。

「おーっと！！これはホームランか！？」

ボールがセンターを越えようとする。

センターがスパイクで土をおもいきり踏んで飛び、ボールをキャッチした感じで降りてきた。

センターがグローブを見ると、打った跡がしっかり残ってるボールがあつた。

「やった！取った！……！」

「ゲームセット……！」

審判がサインして叫ぶ。

「うおおおおー！！！！」

と勝利したチームがセンターに向かって走っていく。いきなり、真っ暗になった。

そう、テレビの高校野球だった。

「くそう、佐々側高校、うぜえ」

高校1年の瞬太が呟いた。

佐々側高校は今年の高校野球の優勝校だ。

で、さっきのテレビで見た高校野球は今年のが映ってる。

「兄ちゃんの高校を侮辱しやがって……」

瞬太の兄ちゃん、守の高校は名川高校で今年の高校野球の準優勝校。

佐々側高校は名川高校をザコと侮辱している。

「母さん、兄ちゃんは何処行ったん？」

居間にいる母さんに瞬太は訪ねた。

「今日も特訓よ」

瞬太の母はテーブルを拭きながら答えた。

守は佐々側高校にザコと言われてから、毎日12時間ぐらい打球、打つ、走る、守るの練習をしている。

雨でもかかさずやってたら、39度という熱を持って帰って倒れたが、まだかかさずやっている。

瞬太は守が特訓している所に弁当を持ちにいった。

「兄ちゃん！」

「瞬太か、弁当か？」

守は最近

「か」

が口癖になっている。高校生の象徴だ！と守は言っている。本当に「か」

が口癖は、高校生の象徴なのか？

「弁当だよ」

「今日のおかずは何なのか？」

日本語がよくわからない。

「卵焼き、鮭、ウィンナー、ミニグラタン、おしんこたぶんそうだよ」

瞬太もなぜしってるんだろう。

「幕の内！？」

ミニグラタンは幕の内なのだろうか？

守は開けた。

「どんぴー！！！！！」

ドンピシャの略らしい。たぶん。

「兄ちゃん、12時間はやりすぎだよ！」

守は弁当を吐いた。

「ばあか、ザコと言われたからには、こんくらいやんなきゃ意味ねえだろうがぁ！！」

瞬太はそうなのか？と思った。

「兄ちゃん、ザコって何なのかなぁ」

守の箸が止まった。

守は瞬太は一体何言ってるんだろうと思った。

「弱い…だろ」

瞬太は立ち上がった。

「兄ちゃんの学校は弱くねえよ！！俺が保証するよ！だって兄ちゃんたちは、地区予選を勝ちのこって、甲子園を2位になった！それ

「のどこが弱いんだ!？」

「瞬太、ありがとう。俺たちは弱くない」

「そうだよ!!」

「じゃあ、今日はこれで終わりにするよ」

「うん」

そういつて、二人は帰っていった。

翌日、朝3時に守は特訓をしに行った。

それから、13時間後、まだ守は帰ってこない。

「兄ちゃん、遅えよ」

瞬太はものすごく心配していた。

「警察に電話しましょう」

瞬太の母と父は頷いた。

隣町の特別競技場。名川高校の練習場でもある場所だ。

守は特訓していた。

なぜかと言うと、スパイクを買いにスポーツショップに行った
ら、佐々側高校の奴らがいた。

「ザコ高の奴らじゃん!!どこふらついてんの!!ハハハハハ!
!」

「うつせえ!黙れ!!」

守は反発した。

「まあ、ザコは空き地でプラスチックのバットでも振ってな」
守はまた反発した。

「さよならなんだから意味ないだろ!!」

「うつせえ、サヨナラでも勝ったもんは勝ったんだ」
もう一人が言った。

「まあ、また特訓でもしてな。無理だけど。ハハハハハハハハハ
!」

佐々側高校の連中は店を出た。

守はやってやるって思っで、特別競技場に走っていった。
昨日の出来事だった。

「オレ、探しに行ってくる！！！！」

瞬太は家を出て走ってあの空き地に行った。

だが、守はいない。

「いない、どこだよ！！兄ちゃん！？」

瞬太はいろいろな所を走った。

いつも立ち読みしてる本屋。

いつも器の下に置いて、走って出ていき、毎日食い逃げだと思われてたラーメン屋。

兄ちゃんの好きなバンドがライブをやっているライブハウス。

唯一人型パンが売ってるから守と瞬太がすごくひいきしてたスーパー。

夜の暇つぶしのパラダイスだと守が思ってる100均。全部見たが何処にもいなかった。

「くそ、絶対100均にいたと思ったのに……」

瞬太はずっと走ったから疲れていた。

「ほかに練習場って言えば……ああ！！」

瞬太はあることを振り返っていた。

守がたまに佐々側高校のグラウンドの他に行く場所。

「瞬太、特別競技場に行ってくるから遅くなるぞ」

そうだ！特別競技場だ！！

やっと思いついた瞬太は、財布の中身を確認した。

「3600円！行ける！！」

瞬太は道路をずっと見て、タクシーが来たら手をあげた。

「久しぶりの客、いらっしやいませえ。どちらまで」

タクシーの運転手が笑顔で出迎えた。

「隣の特別競技場までお願いします」

「隣町か……」

運転手のテンションが下がった。

が、何か思いつくと、スマイルになって言った。

「3周していい？」

「ダメに決まってるだろう!!」

運転手のテンションが下がった。

「3周!!」

「ダメ」

もつと下がった。

一方、守は投球練習をひたすらやっていた。2、3個のボールには血が付いていた。

「いつてー、血豆潰れたよ」

手を振りながら呟いた。

「でも、まだやんなきゃ」

そして、立ち上がった時、
.....ドクン!

瞬太はタクシーに乗っていた。あたりは雨だ。

「兄ちゃん、こんな雨に競技場で何をするん?陸上は自殺行為だよ」
タクシーの運転手は瞬太に言ったが、

「大丈夫、心配かけてすみません」

「そう。じゃ、3周するね」

「ダメ!!」

「なんでさー!?!」

何度言ってもしつこかったので、2周させた。

そして、やっと競技場に着いた。

「兄ちゃん!!」

瞬太は叫んで走った。でっかいドアを開けて、中に入ると、
「!?!」

守は倒れていた。

「おい!!兄ちゃん!!どうしたんだよ!?!なんで倒れてるんだよ!?!おい、兄ちゃ...」

守は雨で冷たくなっていた。そして、死んでいた。

瞬太はもうわかってた。

でも信じたくなかった。

3ヶ月くらい平均12時間特訓をしても、1回しか風邪をひいてなくて、野球が強い、瞬太の憧れの守が死ぬなんて思ってた。なかった。

「兄ちゃん！！兄ちゃん！！兄ちゃん！！兄ちゃん！！兄ちゃん！！」

滴る雨の時の出来事だった。

病院では過労と突然の心臓発作が原因の死亡だと言われた。

やっぱり、あの特訓が全ていけなかった。

2日後、守の葬儀が行われた。

瞬太は葬儀中、いろいろな事を考えていた。

守といつもの空き地で弁当が食えない事。

テレビの高校野球で守の顔が見れない事。

そして、もう兄ちゃんと呼んでも誰も来ない事。

瞬太は葬儀中に声を出して泣いていた。

お坊さんがお経を読んでも、おかまいなく泣いていた。

瞬太の母は邪魔された時のお坊さんの顔に怯えていた。

葬儀も出棺も終わって葬儀の片づけをした時に、聞き覚えのある声がした。

「へー、守、死んだんだ。ザコいから自殺？」

「うわぁー、ありえそう！！はははははは！！」

佐々側高のやつらだ。守をバカにしてたらしい。

瞬太は一瞬にして怒りが爆発して、佐々側高の方へ走った。

「おい！！おまえら！！」

瞬太が声をかけると、佐々側高のやつらが瞬太の方を向いた。

「ああ、ザコの弟ね。ザコの弟もやっぱりザコかなあ！！はははははは！！」

「だまれ！！」

瞬太は怒りの形相で佐々側高のやつらを睨んだ。

佐々側高のやつらは一瞬ひるんだ。

「オレは、野球部に入る！！そして、おまえらを倒して、こっちがザコって言うてやる！！絶対だ！！」

佐々側高校はやつたろっじゃんとした顔で睨んだ。
次は一気に1年後の話。

準優勝校名川高校（後書き）

どうでしたか？評価お願いします。

佐々側高の卑劣な手口

守が亡くなって1年が経った。

瞬太は名川高校のサッカー部に入っていた。

理由は守のように12時間も特訓しなくなかったからだ。

顧問の前で退部を告げた瞬太は走っていった。顧問はまだ固まってる。

「うわあ！！ここが野球部か」

30人ぐらいいる部員が大きな声で素振りしたり、キャッチボールをしてる。

「部長、どこだろ？」

瞬太がキョロキョロ見てたら、ある光景を見てしまった。

キャッチボールで一人が相手を通り越したり、そのボールを取ってきた人が投げたらまた通り越したり、素振りも波が描くような素振りをしてたり、バットが足に当たってもがいてたり、練習もしない奴がいたり、野球部は守が死んでからメチャクチャ弱くなっていた。

「なんだよ、これ……」

瞬太がこの状況を見て啞然としながら言った。

すると、見る限り一番必死な人が瞬太を見つけて、走ってこっちに来た。

「き、君は守の弟かね？」

多分部長だろう。部長はばてて座った。

部長がさつき居たところから瞬太の所まで30メートルくらいなぜ疲れるんだろうと瞬太は思った。

「みんなあー！！守の弟が来たぞ　　！！」

部長が必死に叫ぶと全員が瞬太の方を見て、なぜか帽子を取った。

しかも、部員の一部の帽子がニューヨーク・ヤンキースの帽子

だった。

「部長、ここ、名川高校ですよ？」

ありもしない状況にもう混乱してる瞬太が、苦しまぎれに問いかけた。すると、部長はすんなりと答えた。

「何言ってるんだよ。ここは、名川高校だよ。校門を毎日見てる？」
「じゃあなんだよ、このありさまは！？素振りとかみんなピシッとしてただろ！？高校野球の時はみんな揃ってただろ！！」

瞬太は暴れた。それを3人ぐらいで止めた。

「みんな、みんな佐々側高校がやったんだ」

部長が言くと、瞬太は暴れるのをやめた。

「まあ聞いてくれ。佐々側高校に敗れた後、そいつらにザコと言われた。それから始まったんだ。帽子もザコにはヤンキースでいいとか言って4個ぐらい持ってたたり、グローブを燃やされたり、いろいろされた。それでこうなったんだ」

瞬太は部長の話の話を聞いていくうちに、拳を強く握ってた。

「許せねえ……兄ちゃんを殺したり、名川高校の野球部をグチャグチャにしたり。本当に許せねえ……。よし！！オレはあいつらを甲子園で倒す！！」

「と、ゆうことは？」

部長が聞いてきたので瞬太は答えた。

「野球部に入部します」

「よっしゃああ！！」

部長と部員たちは喜んでる。

「ところで、顧問は？どこ行っただん？」

「それは……」

実は名川高校の顧問は、凄く野球の腕がよくて、半分は顧問のおかげで準優勝になったものだ。

だが、それを佐々側高校に聞かれてしまい、不景気でも生き残るぐらいの給料に引き寄せられて辞めてしまった。

そして、野球部の顧問はほとんど不登校の笠置先生になってしまっ

た。

「……………また、佐々側高校に、取られたんだ……………」

瞬太は自前のグローブをはめた。

「練習、しましょう」

「うおおお!!」

部員たちは走っていった。

ここは佐々側高校。

野球部が凄く豪華だ。マシンも3台用意されている。

名川高校の顧問だった長谷川先生も部員たちにせつせと教えている。

偉そうに誰かが出てくると、全員が何かが迫ってくるようにあせってくる。

「監督、お疲れ様です」

長谷川が言っていると、監督は長谷川に近づいて何か言った。

「ちよつと、職員室に来てくれないか？」

監督の後に長谷川先生がついていく。

「名川高校も駄目だねえ。君がいなければあんなに弱いなんて」

長谷川も名川高校の部員にはあきれていた。

「まったく、そうですねえ」

「で、エースの守君が死んだのは知ってるかい？」

「えっ、死んだのですか？」

「ああ、しかも今年はその弟、瞬太が来ている。そろそろスカウトした方がいいな」

「そうですね」

「また、殺すか」

二人はハハハと笑っていた。

部員も揃って笑っていた。

瞬太はやりきれない気分でした。

なぜなら不登校の笠置先生を毎日登校させるように説得するように部長に言われたのだ。

「はあ、めんどくせ」

と言つて瞬太は石を蹴った。

勢いよく石が飛んでる前に人が立っていた。
けっこう、でかい石だ。

「危ない!!」

瞬太が叫んだがそれを無視してまだ立っている。

瞬太がもう知らないと思って目をつぶってしゃがんだ。

鈍い音がした。

その音が瞬太の心臓をもっと動かしてしまう。瞬太はそつと見た。

その人は石をキャッチしていた。それを見て瞬太は安心した。

「すいません。大丈夫ですか。手」

その人が石を落として手でパンパンとした。

「大丈夫ですよ。慣れてますし」

「えつ、昔野球選手だったとか!？」

「いや、5歳ぐらいから野球はやっていたのです。今はコーチをしています」

「もしかして、今暇とか？」

「はい、そうですけど」

「あの、是非名川高校のコーチをやってくれませんか?お願いします!!」

「なつ、名川高校!? 君、名川高校の野球部!？」

「そうですけど何か？」

「いや」

「あなたはまさか…」

「はい、私は笠置です。」

瞬太は突然の事に驚いていた。

「ど、どうして、不登校になってしまったのですか!？」

瞬太が聞くと、笠置は下をうつむいていた。

「実は…佐々側高校に言われて…」

「えっ!!」

長谷川が退職して笠置が野球部の顧問になった時の帰り道。

「ついに、ついに私だけが顧問の部活が!!しかも、得意の野球なんて」

すると、前に3人ぐらいの人がいた。

「?誰だ?」

3人は笠置に近づいた。

「こんばんはあ。名川高校の笠置先生」

「このユニフォームは、佐々側高校か?」

「まあまあ、佐々側ショートコント!!」

はあつて感じの笠置は立ち止まった。

「部活終了後の名川高校のみなさん」

2人が出てきた。

「マジかよお。次の顧問は笠置かよお!!」

「メチャ最悪!!」

「佐々側高校も長谷川と一緒に持つてけばいいのになー」

「誰ももらわないだろ」

「ハハハハハハ!!」

「サンハイ、佐々側高校!!」

3人は走っていった。

笠置はずっと立っていた。

「ひでえ」

瞬太はあまりのことにひでえしか言えなくなった。

「で、本当に名川高校の人はそんなこと言ってたのかな?」

「いえ、みんな笠置先生を待ってます」

「そっか」

「では、来てくださいよ」

「分かった」

その返事を聞くと安心して走っていった。

「おーい、君の名前は」

「オレは、福沢瞬太です!!」

「福沢!？」

瞬太は走っていった。

「福沢、か」

「よかったあ。笠置先生来てくれるんだって」

「マジよかった」

「あれ、あれ佐々側の奴と笠置先生じゃん」

太田と倉木が歩いていると、笠置を囲んでる佐々側高がいた。

「笠置先生。行くんですね。学校」

「あんなに言つたのに」

「私は、おまえらの事は信じない!!私は野球をしたいんだ!!」

笠置は佐々側高の奴らを睨んだ。

「うるせえ!!二度と学校に行けない体にしてやる!!」

一人を中心に笠置に殴る蹴るの暴行を加えた。

「おい、これやばくないか!!」

二人は見つめあつて頷いた。

「行くぞ!!」

それを合図に二人は走っていった。

「おい!!何してるんだ!!」

佐々側高は二人が出てきてちよつと焦った。

「うるせえ!!おまえらも二度と野球ができない体にしてやる!!」

倉木と太田は殴られていくうちに、だんだん力が弱くなりどんどん殴られた。

1時間後。

「こんぐらいでいいか。帰るぞ」

「ああ」

佐々側高は帰っていった。

3人はボコボコにされた。

笠置はヨロヨロしながら立ち上がって言った、

「だ、大丈夫か？」

倉木と太田も立ち上がった。

「だ、大丈夫すよ」

「そ、そうですよ」

「野球、できるか？」

「はい」

「よかった」

笠置はグラスとして倒れた。

「先生！！先生！！」

翌日、笠置は来ていた。

「笠置先生！！大丈夫ですか」

「ああ、それよりも佐々側高はひどいな。あいつらを倒そう」

「おおおおお！！」

樹海の恐ろしい罠

不登校だった笠置先生も登校してきて、部員たちもだんだんやる気が出てきた。

あと、笠置先生の野球の腕前にも驚いた。

「すげー、これなら長谷川先生の代わりを十分に果たせるよ」

部長もはしゃぎながら言っていた。

佐々側高校、野球部会議室。

野球部の顧問柏木とコーチの長谷川、部員が集まって会議をしていた。

「何！？笠置が登校してきただ！？」

笠置を不登校にさせた部員は頷いた。

柏木は会議用の机を叩いた。

その反動でコーヒーがこぼれて長谷川が焦りながら拭いている。

「私には、許せない恨みがある。それまでは名川高校を血祭りにあげても、奈落の底へ落とせ！！わかったな！！」

「はい！！」

部員のシャツとした返事を聞いて柏木が不適な笑みをした。

部活動の練習時間も、そろそろ終わりへと近づいていった。

「ふう。久々の部活は疲れた」

笠置先生も汗を拭きながら疲れていた。

部員たちは円になった。その真ん中に部長と笠置先生が入った。

「みんなお疲れ、多分いままでが一番部活らしい部活をしたから、疲れてるから、ゆっくり休むように、それでは、先生の話です」

笠置先生はゆっくりとおじぎして話した。

「えー、笠置です。野球部の顧問になりました。えー、この名川高校の野球部を皮肉した佐々側高校を倒すのと、プレーを楽しくするを目的として次からも頑張ってほしい。ではゆっくり休むように」

顧問らしいことを言って満足した笠置先生と共に部活を終わら

せた。

瞬太は部長と帰った。

「なんか、ありがとうね。瞬太君」

部長は下を向きながら言った。

「あつ、オレの名字は福沢です」

「あつ、そうか。福沢君」

「でもなんで部長がオレにお礼しなきゃいけないんですか？」

「福沢君がいなきゃ、部活は最弱、顧問は不登校、しかも顧問がないから大会は出れない。大会は出れないからなぜ練習するのか分からないから練習しない。ずっとそうだった。もしこの世に福沢君がいなければ、もう廃部だったかもしれない。ほんとにほんとにありがとう」

部長は瞬太に何度も何度もおじぎした。

瞬太は突然の話の展開に焦っていた。

「ぶ、部長。もういいです。もういいです」

「そうか。それじゃあ」

部長は走って帰っていった。

「部長……」

「ただいま」

瞬太はあくびをしながら帰ってきた。

瞬太は帰ってきて、荷物を置いた後、すぐに兄ちゃんの仏壇へと行った。

仏壇の前に正座してチーンと鐘を鳴らした。

「守兄ちゃん。いまの野球部は顧問の笠置先生も学校に来たし、みんな頑張ってる。もう野球部のことは緊張しないでぐっすり眠ってください」

またチーンと鐘を鳴らした。その後、線香を付けて手を合わせた。

次の日の名川高校野球部。

「練習試合しようと思うんだ」

突然、何言ってるんだこの人はって感じで全員が部長を見た。

「およよ、練習試合しようと思うんだ」

いや、2回言っても変わらないしという感じで全員が部長を見た。

「くしょー!!」

部長がグローブを地面に叩きつけた。

「もう練習試合やるの!!もう決まったの!!」

全員、しばらく黙った後気づいた。もちろん。笠置先生もだ。

「はいー!!」

サッカー部と陸上部が白い目で野球部を見た。

部活中円陣組んで騒ぐ奴など見たことないからだろう。

「ふざけんなよ!!ちゃんと先生の許可ぐらいはしろよ!!」

瞬太も同感してうなずいた。

「落ち着け!!相手の高校を言うぞ!!」

部長が両手を広げて紙を見た。部員の心臓が大きく大きくなつていく。

部員が涙を流していた。瞬太と部員と笠置先生は訳が分からなかった。

「相手…、長沢学園高等学校」

部員が固まった。

「はい !?」

瞬太が何が何だか分からないまま、部員が騒ぐのをサッカー部と陸上部と一緒に白い目で見ていた。

「ふざけんなよ!!あんな場所、二度と行きたくねえ!!」

副嶋が泣きながら叫んだ。

「俺だってそうだよ!!」

他の部員も泣きながら叫んだ。

「せ、先輩!!長沢学園って何ですか」

瞬太が聞くと、大沢が泣きながら言った。

「何ていえばいいんか、なんか地獄絵図のようなものがき苦しむような、もうやだ　！！」

ピッチャー候補の村中がボールをおもいつきり投げて的の真ん中に当てた。

そっとうのを火事場のばか力と言うのか。

「とりあえず、明日だ！！わかったか！？」

「もうやだ

！！」

翌日。

部員が学校に着いて即泣いた。

瞬太はそんなに泣かなくてもいいって思った。

とりあえずバスで出発。バスの中ではものすごく重い空気が流れた。

瞬太が隣の羽島に言った。

「先輩、なんでそんなにシラケてるんですか」

「シラケるしかないよ。あんな場所で野球したくない」

瞬太はそんなに先輩たちが青ざめるなんて、どんな学校か気になって仕方がなかった。

だんだん田舎町へと変化していく。そのたびに部員のテンションが低くなっていく。

やがて、学校なんかなさそうな樹海の駐車場に止まった。

瞬太が訳分からないう状況の中、部員がバスから降りていった。

瞬太は最後に降りてきた部長に聞いた。

「部長、なんで降りるんですか？電車に乗り換えでも電車なんか走ってる風景じゃないし、何ですか？」

部長は涙を流して呟いた。

「ここから、歩くんだよ」

すぐくジメジメして日向もないような寒い樹海を重い荷物を背負いながら歩いていく。

瞬太は冷や汗をかきながら、気味わりいって言ったら、林が瞬太に言った。

「前自殺者の死体があつたんだぜ」

「おい、思い出させるなよ」

副嶋や他の部員が言った。

「いやあ、あれはまともにびびったよ。真面目に死んでるんだもの」
林の話を聞きながら、瞬太はあっけにと取られていた。

「林先輩……」

「ん？」

「ハブが、巻き付いてますよ」

「うわあああああ……」

林の足にハブがうずまきを描くように巻き付いていた。

部員たちも騒いで下を見てみると、たくさんのハブがいた。
それでは、部員たちの声だけをお楽しみ下さい。

「うわあああああ……」

「毒だあ……毒地獄だ……ぎゃー」

「母さん、父さん、今まで僕を育ててくれてありがとう」

「なんだよ……ここ沖縄じゃねーぞ……」

「へび、べひ……うぎゃあああああ……」

「落ち着け……落ち……うぎゃあああ……巻き付いてきたあ……」

「おい……先生には3匹も巻き付いているぞ……」

色々何かあつてなんとか野球部の人たちはハブを追い払った。

瞬太は涙目で逃げていくハブを見送ってる途中、林は言った。

「な、すごいだろ？」

瞬太はすごいどころじゃねーと思った。

ちなみに部長は簡単にハブを踏みつぶして先に進んだそうです。
すごいですね。

しばらく歩いていると何かが目に入った。それは、59度の坂だ。

「うわあ、中途半端ですごい」

瞬太は呟いた。

「ああ、だりい……」

笠置先生が叫んだ。部長が何も言えなくたたずんでいた。
その坂を乗り越えなんとか着いた。

「うわぁ！！！！すげえ！！！」

瞬太が叫んだのは、その長沢が近世代の様な街。

レインボーブリッジみたいなものがあるし、とにかくすごい。

「ああ、なんか今までの事を忘れた気分」

「ああ、すごい」

部員が長沢街に見とれてる時、瞬太は気付いた。

「あれ、部長、みんなあの樹海を通るのですか」

すると、先輩が空に指指した。

瞬太が空を見ると、佐々側と書いたヘリコプターが行き来してる。

「佐々側にヘリコプター作ったの、部員がばられた金を集めて……」

「……ははは……部長……勝とうね」

瞬太はやる気を無くした。次は試合。

「ああ、だりい……！」

笠置先生が叫んだ。部長が何も言えなくたたずんでいた。

その坂を乗り越えなんとか着いた。

「うわぁ！！！！すげえ！！！」

瞬太が叫んだのは、その長沢が近世代の様な街。

レインボーブリッジみたいなものがあるし、とにかくすごい。

「ああ、なんか今までの事を忘れた気分」

「ああ、すごい」

部員が長沢街に見とれてる時、瞬太は気付いた。

「あれ、部長、みんなあの樹海を通るのですか」

すると、先輩が空に指指した。

瞬太が空を見ると、佐々側と書いたヘリコプターが行き来してる。

「佐々側にヘリコプター作ったの、部員がばられた金を集めて……」

「……ははは……部長……勝とうね」

瞬太はやる気を無くした。次は試合。

樹海の恐ろしい罫（後書き）

そろそろ野球の話が来るので気長に待ってて下さい。ではカツオでした。他の小説もどうぞ。

タイガー殺し（前書き）

地獄の樹海を抜けて、やっと近代都市の長沢市にある長沢高校に着いた瞬太たち。そこで見つけてしまった『団結の儀式』。果たして『団結の儀式』とは、そして長沢高校の実力とは。

タイガー殺し

長沢高校にやっと着いた名川高校だが、疲れて野球なんかできない状況になった。

瞬太は今思い出した。

守が一番疲れたのは、樹海で疲れさせて勝つ方法を使った高校だつて。

今納得した。所々に締め付けられた後があるし。

でも長沢は良いところだ。

みる限り大都会なのに山が囲んでるし、寺らしき所もあるし、新幹線もたくさん通る。

なのに、なんで街の入り口がこの樹海しかないのか。それが一番気になる。

まあとりあえずここには練習試合で来ているのだから、街にいちやもん付けなくても平気だと瞬太は思った。

長沢高校に着くと、瞬太は驚いた。野球なんて一気に4回の試合ができる程の広さだ。

「部長、ここめっちゃくちゃ広いですね」

「確かにここは野球をするなら最適な場所だ。だけど、樹海しか行けないから……」

もう長沢高校の野球部は練習をしている。

袖に赤い線が3本入っているセンスがいいユニフォームだ。

「名川高校野球部部長の林田です。お願いします」

部長が一步前に出て、帽子を取ってあいさつした。

「お願いします!!」

その後、部員が一步前に出て帽子を取って頭を下げた。

「はい、よろしく」

白髪交じりの長沢高校の顧問があいさつした。

「さあみんな、練習をやめて。試合だ!!」

「はい!!」

その時、瞬太と同級生の岡崎が何かに気づいた。

「どうした？岡崎」

野口が言つと、岡崎は長沢高校の人たちに指を指しながら言った。

「あいつら、同じスパイクだ」

部員たちが一斉に長沢高校を見る。

確かに長沢高校の人たちは、同じスパイクだった。

「あつ、本当だ!!」

すると、栗島が気づいて言った。

「あとあいつら、グローブもバットも全く同じだ!!」

部員たちがまた長沢高校の人たちを見ると、確かに長沢高校の人たちはグローブもバットもサイズは違うが同じだ。

「もしかして、これは、団結の儀式」

部長が汗を垂らしながら言った。

「団結の儀式？部長それは何ですか」

岡崎が聞くと、部長が何かに怯えているかのような顔をした。

「団結の儀式。それは1980年の高校野球でやっていたグローブもバットもスパイクも全く同じにして、一人一人が団結して勝利を収めようという目的で行う儀式だよ」

「へえ、それは野球だけに限らず団体で行うスポーツにはいい儀式ですね」

笠置先生が言つと部長は焦った。

「何言ってるんですか!!この儀式を破る。つまり、一人だけで勝利しようと行動する人を発見した場合、集団リンチ後、強制退部」

「えっ!!」

「だから、ランナーがいる塁の近くでスローフライとかしてアウトしたら!!」

「はあ!!そんなのよくあるだろ!!俺だって何回もしてるぞ!!」
そのころ長沢高校では。

「見ろ!!。俺らの儀式を不評してるぜ」

キャッチボールしている一人が言いながら投げた。

「確かに団結の儀式は、効果が発揮される分、ペナルティーがある。だが、長沢高校はこれだけじゃないぜ」

ピッチャーが投球練習をしている。

「なっ、東」

壁に跳ね返ってきたボールを取って、ほほえみながら『ああ』と言った。

ついに試合が始まった。じゃんけんの結果、名川高校が先攻だ。

一番、細波。名川高校唯一の長打者だが、練習はさぼり気味だ。

「がんばれよ！！細波」

笠置先生がバットを細波にバットを渡しながら言った。

「はい。絶対外野を走らせます！！」

笠置先生は細波を見ながらうなずいた。こいつなら絶対やると確信したからだ。

細波がバッターボックスにつき、バットでホームベースを二、三回叩いて、センターとレフトの間をバットで標的を定める。

「タイガー・タイム」

内野と外野がバッチこいやーというかけごえを背に受け、ピッチャーが投げた。

「えっ……」

ベンチ内がつい応援をやめてしまう程あきれている。

なぜなら、ボールがゆっくりゆっくりと進んでいるからだ。

ボールを投げ飛ばすというよりは、ボールを浮かしているといった方がいいのかもしれない。

「フワフワって効果音をつけたいな」

「ああ」

細波もおもいきり打ってやるぜって感じの構え方になっている。「へっ、なんだこのフワフワボール。まるで風船を投げてるようだぜ」

ピッチャーが笑みを浮かべる。

すると、ボールが急に速く回転していまさっきのフワフワボールとは違う速さになった。

ボールは一瞬にして細波を素通りして鈍い音と共にキャッチャーミットへと入った。

「ストライク!!!」

細波は呆然と立ちすくんでいる。

「何がタイガーだい？」

ピッチャーが笑みを浮かべながら言った。

「マジかよ……」

瞬太は驚いて微動だに出来なかった。

タイガー殺し（後書き）

意味不明な投球で長打者で打率もある細波を見逃しにした。その投球を見た細波が行った行動とは？果たして名川高校は勝てるのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104a/>

土産土

2010年10月15日20時55分発行